

## 「子育てについて考えてみましょう PART3」

かけがえのない日々を子どもたちと過ごして――

園長 高杉美稚子

卒園、修了の日まであとわずか！

子ども達の2カ月先の成長の姿を追いながら、カリキュラムを組んでいくという幼稚園の特性の為か、歳のせいかわ、最近では1年がいえ10年が随分とはやく感じるようになりました。入園式、始業式が、そして平成になったのがつい昨日の事のように思われますが、卒園、修了の日まで間近かとなり、年長組のお部屋では、「卒園まであと 日」の表示が掲げられる日もあとわずかです。子ども達の成長が嬉しいような、でもちょっと寂しいようなそんな毎日です。

さて、入園されてから、幼稚園では、「幼児期は、体験する事で学び、行動する事で、思考する」という事を前提に、「その年齢に必要な適時適量の直接体験を通して、がんばろうとする心とがんばれる体を培う幼稚園」である事に務めてきました。

「幼児期に感動を持って身近な環境と触れあう直接体験を十分もつ事こそが、幼児の知的好奇心を誘発し、やがて感受性豊かな、思考力とやる気のある子供を育てる。」「体験を通して、洞察力、先見力、判断力、実行力、豊かな心と将来を予測し情報を分析する力を育てることが、21世紀を生抜いていく為に、又、どんな事にも対応できる人間になる為に必要である」と考えているからです。

幼児期の直接体験が持たず、見る、聞く、話す、感じる体験の大切さは、百万語の言葉より説得力を持つ事はいうまでもありません。

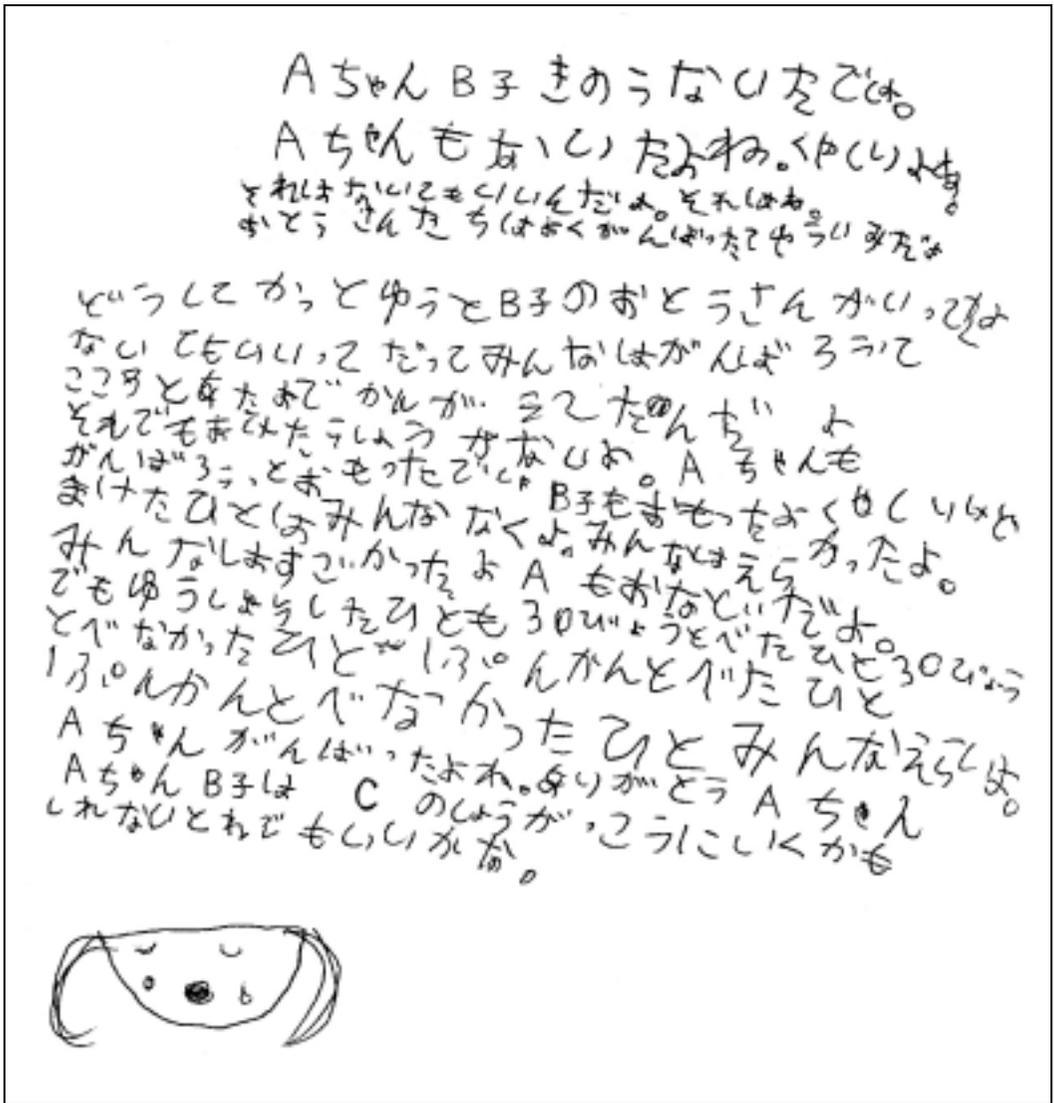
しかし、あふれすぎた情報は、今子ども達の回りにうずまき、いざ行動しようとする情報にふりまわされます。情報洪水の中、子ども達には、その情報を取捨選択する能力を培いながら、私達も又、ヴィジュアルの時代といわれる今の時代に育つ子ども達の環境作りには最新の情報を持って臨んできました。吉塚幼稚園の環境作りの中で、子ども達は、確実に育ってくれているようです。

先日、そんな子ども達の育ちの姿を直接感じるがありました。縄跳び大会あけのことです。お部屋に子ども達がやりとりした手紙が一通落ちていました。その手紙を拾った、担任が、涙を眼に一杯溜めながら、私に見せたくれたのでした。

ただただ、感動でした。子ども達その思いを抱きしめたい瞬間でした。保護者の方の了解を得て、掲載させて頂くことに致しました。以下全文です。

「Aちゃん、B子ね、きのうないたでしょ。Aちゃんもないたよね。くやしいよね。それはないてもいいんだよ。それはね、おとうさんたちはよくがんばったってゆういみだよ。どうしてかってゆうとB子のおとうさんが、いってたよ。ないてもいいって。だって、みんなはがんばろうってところとあたまでかんがえてたんだよ。それでもまけたらしょうがないよ。Aちゃんもがんばろうとおもったでしょ。B子もがんばろうとおもったよ。くやしいけど、まけたひとは、みんななくよ。みんなはえらかったよ。みんなはすごかったよ。Aちゃんもおなじだよ。でも、ゆうしょうしたひとも、30びょうとべたひと、30びょうとべなかつたひと、1ぷんかんとべたひと、1ぷんかんとべなか

ったひと、みんなえらいよ。Aちゃんがんばったよ。ありがとうAちゃん。Aちゃん、B子はCしょうがっこうへいくかもしれない。それでもいいかな



年長組の女の子の手紙です。いかがですか、何を感じられますか。  
 縄跳び大会に向かって、一生懸命頑張った、でも負けてしまった、くやしかった、そして二人は泣いてしまった、その翌日の、手紙です。  
 手紙の文章力のすごさもさることながら、何という感受性が育っているのでしょうか。まず、つらい、悲しいことをつらい悲しいと感ずることが出来る力、そしてそれを素直に友達にも親にも表現できる力。又お父さんのアドバイスが素晴らしい。「泣く事は恥ずかしいことではない、泣いていいんだよ」としっかりあるがままの姿を受容して下さり、更に「泣けたのは頑張った証である」と、B子ちゃんの枠組みの転換もして下さり、プラス思考で望んでおられます。

そしてそのアドバイスを素直に受け取るB子ちゃん。泣いてもいいって自分が受容された後、そのことを納得したB子ちゃんは、お友達にもそのことを伝えています。次に、頑張ろうと思ったそのことが素晴らしいことであること、負けた人も勝った人も同時に、等しく素晴らしかったとを心と頭で感じ、理解しています。

最近の若い人は、呼吸が浅くなり、ハラまで物事を落として考えないで頭の中での情報のみですばやく処理してしまいがちです。その為に、ころころと考えが変わったり、切れやすくなっているといわれています。ですから、頭で理解すると同時に体験を通して、体と心で感じる事が大切なのです。そうすると、自分の決断に揺るぎがありません、だから、自己決断したことを自己責任取れるのです。

この手紙の最後にありがとうAちゃん。そして、別々の小学校に行くかもしれないけれど、これからも友達でいようねという思いで締めくくられている、この理解しあえたAちゃんに有難うと感謝できる謙虚さ、素直さ、別れ行くせつなさへの言葉が更に感動的です。5歳児の感性の素晴らしさ、大人が推し量れない程に鋭いものがあります。いや5歳児だからこそその感性なのかもしれません。

私達大人は毎日の雑用や仕事に追われ、小さな事への気づき、発見する力、感じる力を忘れて、いえ意図的にどこかへ押しやっているのかもしれません。そしてかえってそのことで、ただ、自分の気持ちに素直になれれば、感じたままを大切に、相手を傷つけないようにして、気持ちを素直に伝えることをすればいいのに、そこに理屈や言い訳やこじつけをつけて、本当の自分とは別の自分を作り上げて問題を複雑にしているのかもしれません。そして、自分で本当の自分とは違うバリアーを作っておきながら、本当の自分はこうではない、本当の自分は理解をされていないと悩んでいたりします。

感じたあるがままの自分を大切にしないで、素直になれず、自分の気持ちと反対のことを言ったり、行動したり、うそを言ったり、かえって知らないうちに他人を、そして自分自身を傷つけているのかもしれませんね。だからこそ、素直な気持ちのこの手紙の中には、大人がはっとさせられる人として大切なものがつまっているのではないのでしょうか。

この心の育ちは、幼稚園のたった一つの縄跳び大会だけで育ったものではないでしょう。それは一つのきっかけであっただけに過ぎないでしょう。でもその体験を通して、子ども達の心は確実に実っていく動機付けになったことは確かなことです。

本園の教育理念の『その年齢に不可欠な適時適量の刺激をもった体験教育をする事』に重点を置いている事にあるように、自ら体験する事を通してしか、子ども達は育ちません。又、知的能力も幼児期は体験を通してでなければ、ただの金メッキで真の力は身についてきません。いえ、私たち大人も、ただ人の話を聞いているだけでは、「良い話だったね」ですぐに忘れてしまいます。でも自分の体験を通して学んだことは、体にしっかり染みていきます。体験で得た言葉には、共感と感動があります。たいした言葉ではないと思っても、似たような経験をした後では重みも、感じ方も違います。

その意味では、次のドッチボール大会やお遊戯会でどんな体験をし、成長を子ども達が表現しようとしてくれるのかがとても楽しみです。

さて、このように子ども達は、家庭での温かさと本園の教育の中で、それぞれに豊かな成長をとげてくれました。この先、子ども達にどんな困難が待ちうけていようと、本園で得た体験を土台に問題の根底にある事をしっかりとらえ、「大樹のようにすくすくと伸びてゆくこと」を信じています。

いよいよ平成14年度も大詰めです。平成15年という区切りの年に、卒園、そして新一年生となられる年長組さん、卒園式がまじかになってまいりましたね。年長、年中、年少児と、それぞれ卒園、進級に向かって、その実感がじわじわと感じられてくるのではないのでしょうか。半面期待する所が大きくて子どもにとって負担にならないように気をつけましょう。「そんな事では学校にいけませんよ」「先生にしかられますよ」等いわないように気をつけましょう。余計なプレッシャーが子どもの心を重くし、小学校や進級へのイメージを暗くします。生活活指導の確認については「ママのてまくら」の最終ページをご参照下さい。

かえりみれば、あの入園式の日、お母様と一緒にの不安げな子達、でも時がたつのは早いものです。泣き顔だった子ども達も、当時の緊張や不安に満ちた表情は見あたりません。21世紀も3年経ち、時代の方向は、すでにみえてきました。「根を育てれば大樹は育つ」と子ども達の根本にたった教育を行ってきましたが、この激しい時代の流れの中で、先人達が残した遺産の上に、新たないびきを重ね、幾年かを経て、子ども達が、成長した時、本当によい時をきざんだと自負できる時代である事を願ってやみません。

子ども達の心に残る毎日を...と職員一同頑張っただけでまいりました。私自身も、人の為になりたいと思って始めた学びは、結果として、あらゆる場面で、自分の感覚の鋭敏性を磨き、柔軟性を身に付け、自分を知ると同時に自他共に受容し認めることが出来る私を見つけることが出来ました。

これからは、少しでも幼児教育関係者、教師になる前の学生や、母親になる前の若き女性等にも、この実践を伝えていく事が出来ればと考えています。

今、幼児教育は子育て支援が叫ばれていますが、私には、子育て手抜き支援にしか見えません。目白大学人間発達学部教授 中野由美子も、文部科学省の平成14年度幼稚園教育課程理解推進事業中央審議会の中で次のように述べています。

「本当の子育て支援は、親子が共に育つ為の環境作りである。親を育て、その親を支援者に育てていく事が大切である。子育てのつまずきを実感した親だからこそ悩んでいる親の支援者になれるのである。つまずきを学びにして、親子のボタンの掛け違いを直していく、親が子どもの育つ姿をしっかりと見て、声を聞いて、子どもが育つ姿を見て、親が子育てを楽しむ事が出来るようになり、子どもの育ちが豊かになる。だから、親は人に預けっぱなしをするのではなく、子どもの姿を知ることが大切である。そして子どもが、親と共に育って行く。これこそが、子育ての伝承である。」と。

この考え方は私もずっと温めてきたことでした。本当の子育て支援はこれであると。子どもを見つめることで、子どもの変化を楽しむ事が出来、子育ての楽しさが理解できれば、親自身が変わります。その変化を見て、子どもが変わります。子どもが変わり、親が変わることで又、子どもが成長します。そして更に、子どもを見つめ、その自分の問題で、悩み、苦しみ、疑問を感じ、ひっかかった人ほど、人を理解する事が出来るし、共感できますので、同じ悩みを持つ人を援助できます。

この循環を後押しするのが、本当の子育て支援です。子どもを長時間、親から離す施策が子育て支援ではないと考えます。客観性を持つことはもちろん最も重要ですが、その自分を通して体験したこと、感じたこと、実践はそのまま生きます。私は教育のコミ

ユニティセンターとしてその仲間作りをこの吉塚幼稚園でしていきたいと考えています。

共に悩み、話す中で、その人が次に悩む保護者を支援できる人に育つ、そのことによって地域や同じ悩みを抱える人々のネットワーク作りが出来、結果として、その輪の中で次世代が育っていくことが出来ると今、私は考えています。そんなネットワーク作りがこの吉塚幼稚園を中心に保護者の方とともにできたら嬉しいと考えている今日この頃です。そしてそのネットワークは卒園生まで広がり、その和・輪の中で卒園していく子ども達が、これから先も、のびのびと、健やかに、そして、たくましく、大きく育ってくれる事を願いつつ、本年度の「大樹通信」も本号をもって終りとします。

一年間のご協力とご理解に心から感謝申し上げます。

最後に、卒園児のみなさん、たくさんの思い出を今年もありがとう。この幼稚園からいつまでも、いつまでも応援しています。又、会いましょう。

園長 高杉美稚子